

ハレンチ風紀委員は
学内Hでデレ堕ちさせる！





「服装の乱れは心の乱れ！ この風紀ミコトは、ひとりも見逃さないわよ！」

爽やかに晴れ渡る、K学園の空の下。

朝の校門前に陣取ったわたしは、他の風紀委員と一緒に、生徒達に目を光らせる。

「そこの男子の方、ワイシャツの第一ボタンも締めてください！」

「あ、女子の方、少し失礼……やっぱり。スカートが二センチも短いです！ 直して！」

はぁ。

嘆かわしい。

服装のだらしない人は、結構いる。

四人に一人くらいが、注意の対象だった。

ひとりひとり、キチンとしてもらわないと。

心の緩みが伝染して、学園全体がだらしなくなったら大変よ。

わたしが仕事に没頭していると、学園屈指の問題児が現れたの。

「よお、ミコト。相変わらず堅物してんなあ。二、三発やらせろよ」

支離滅裂に声をかけてきたのは、男子学生だった。

やらせろ、なんて、なにを考えてるのよコイツは。

どういう意味かは、わたしでもわかる。

イマドキの女子校生をしていたら、イヤでもそーいう話は耳に入ってくるのだもの。

わかっているからこそ、コイツの異常性は際立つ。

朝の校門前で言うことか。

耳にした他の学生は苦笑してるけど、わたしは愛想笑いする気にもなれない。

しかもコイツは、女子と登校してきたの。

顔は結構、整っているけれど、見るからに頭の軽そうな女子校生。

服装はだいぶ乱れていた。

まったく、ブラウスのボタンを外して、胸元が見えかかっているじゃない。

スカートもやけに短い。ちょっと風が吹いたら、めくれてパンティが見えそうだわ。

わたしは彼の言葉を無視して、仕事の言葉を発した。

「あなた！ 胸の前が開きすぎです！ しかもノーネクタイ！ そちらの女子も、ボタンを締めてスカートを上げてください！ ふたりとも、すぐに直してくださいね！」

至極真つ当なことを言ったのに、どちらも悪びれもしない。

それどころか、男子の方がわけのわからない反論をしてきた。

「えー、こいつはファッションだぜミコト。オレの鍛え上げた胸板を常時チラ見できるのは、男子で言えば、女子のパンチラを常時見られるのと同じ。女子には嬉しいことなのさ」

すると女子も、「うんうん、嬉しい」と相づちを打つじゃないの。

「あんたって男は〜」

わたしはわなわな震えた。

確かに、コイツの胸板は格好いいかも知れない。

むだ毛はキレイに処理されていて、細く開いたワイシャツの身頃からは、はち切れそうに膨れあがった胸元がのぞき、清涼系のいい匂いがただよっている。

通りすがりの女子の何人かはうっとり見つめていた。

「格好のことを言うなら、ミコトはどうよ」

「わたしのなにがおかしいの？ ひとつの乱れもない制服姿じゃないの」

「基本そうだけど……両胸とお腹のところに、自分の名前を書くかフツー。『風紀命』ってさ」

「あのねえ。これは、風紀委員の印なの。腕章を着けるのがオーソドックスだけど、文字のワッペンを目立つところに貼れば、より分かりやすいし、本人だって、委員の自覚を強く持てるわ。素晴らしいアイデアじゃないの」

「髪留めにしたって、文字通りの『風紀委員』。色気なんか皆無。それでも女子校生かよ」

「余計なお世話よ！」

「ま……顔はキレイに整ってるものの、七三分けのデコ出しで色気はない。けど、カラダは立派に女子校生してるぜ」

「なっ！」

彼はじろじろわたしを見てくる。

有り体に言って、いやらしい目だった。

なにしろ、オッパイとお尻と太ももを、特に舐め回す風に見るのだから。

「 Cottonの薄い制服の胸元をパンパンに伸ばすロケットオッパイ、地味なプリーツスカート を盛り上げて輪郭を浮かせてるプリケツ、ムチムチしたニーソの太もも……うん、何度見ても、〇六歳真っ盛りの、ピチピチ女子校生だ」

「女性を卑猥な目で見ないで！ 汚らわしい！」

「幼馴染みとして、感無量だ。立派に育ったなあ、ミコト」

「そういうあんたは、乱れ育ってるわ。幼馴染みとして情けないったらありやしない」

「オレたち、袂が分かれたナー」

「分かってるなら、さっさと服装を直しなさい！」

「二、三発やらせてくれるなら」

「あんたって男は！」

「わわ、わーったよ、グーで殴ろうとするなよ……ちえっ」

不肖の幼馴染みは、いかにもしぶしぶ胸元を閉じた。

通学カバンからネクタイを取り出し、なめらかに締める。

やればできるじゃないの。

手間をかけさせないでよね！

わたしは「行ってよし」と手を振って、難物を追い払う。

でも、すぐに違和感を覚えた。

後ろから見られてる気がして、振り返る。

その瞬間。

パシャ。

ケータイで写真を撮られた。

何メートルか先で撮影したのは、今やりあった幼馴染み。

彼は既にネクタイを外し、胸板をチラ見させる位に身頃を開いて、元の見た目に戻っている。

だらしのない格好でスマートフォンのレンズをわたしに向けていた。

一枚撮った彼は、「へへへ。脇の下からすらはみ出すなんて、マジでデカ乳だぜ。オレに絡んだ仕返しに、アプリでエロ水着姿にして、学園裏サイトに放流してやる。お堅い風紀委員ミコトのハレンチ画像。アフィリエイトも使えば大もうけだ」なんて言いながら、テキパキ指を動かしていた。

わたしの頭は一瞬で沸騰した。

「コラァ！」

思わず持ち場を離れて、アイツに飛びかかったわよ。

女子は「きゃあっ！」と悲鳴を上げて、さっさと逃げたわ。

わたしはそっちには目もくれず、彼だけを狙ったの。

「うお！ なにすんだミコト！」

「それはこっちのセリフよ！ 今すぐ、スマホを渡しなさい！ 画像を消して、ふざけたアプリも消去してやる！」

「学園へのケータイの持ち込みは、校則違反じゃないぜ！」

「やかましい！ それ以前の問題よ！ このっ、このっ！」

もみあうわたしたち。

アイツも必死で、やたら身体をくねらせる。
そのうち向こうは、スッテンころりと転んだ。
もみ合えば、ありそうなことだったけれど、今回だけは様子が違う。
アイツは仰向けに転んだのだけれど、なんと顔が、わたしのスカートの真下……中身を全部見上げられる位置にあるじゃないの！
しかも悪いことに、アイツの目の前にはスマホがあったの。
丁度、スマホで何か撮影するときくらい、離れてる。
目にした瞬間、わたしは血の気が引いた。
それに追い打ちをかけるように、
パシャッ。
ケータイのシャッター音が鳴り響いた。
「あ……あああ……う……うそ………うそお………」
わたしは顔面蒼白だった。
だって、そうでしょ。
スカートの中身を男子に見られただけでなく、撮影されちゃったんだから！
しかも相手は、逆恨みで女子のいやらしいアイコンラを作ってバラ撒くことを考える、タチの悪い男なのよ？
ハッ！
ショックを受けてる場合じゃないわ。
まだ間に合うかも知れない。
わたしはスカートをなびかせながら、バックステップ。
風紀委員の仕事には体力もいるから、結構鍛えてる。
ハプニングにあっけにとられていた周囲の学生から、「おお、ナイスステップ」などと賞賛される中、未だにひっくり返っていたアイツから、ケータイをひったくった。
ケータイの画面は暗転していたわ。
スリープモードにしたのかしら。
すぐにタッチしたけれど無反応。
よく見れば、電源ランプが消えている。
電源をオフにしたのよ。
電源を切る場合、ボタンを長押しするにしても、画面から実行するにしても、動作完了まで数秒かかる。
写真を撮った後、もしも妙なことをしていたら、まだ電源オンのままだったはず。

つまり、撮影後すぐに電源を落としたことになる。

それか、電池が切れたか。

どちらにしても、変なアプリでアイコンを作られ、しかもバラ撒かれるという事態は避けられたみたい。

タチの悪い奴にスカートの中身を見られた問題はあるけれど、わたしは少しだけ、胸をなで下ろした。

そのとき、朝のHRの予鈴が鳴ったの。

馬鹿なことをやってる間に、学園に入る時間がきたわけよ。

「これは没収します！」

わたしは無言を言わさず言ってやった。

顔は合わせず、背中を向けて。

『今日の』スカートの中身を見てしまったアイツとは、もう、まともに顔を合わせられない。

アイツは無言だった。

その場で、なにか言いふらすのではないかと心配になったけど、杞憂だったわ。

立ち上がって、パンパンと埃を払い、カバンを手にする気配が伝わってくる。

「やれやれ、朝からタイヘンだったぜ」

それだけ言って、わたしには一瞥もくれずに、学園に入っていった。

でも、やっぱりというか、この騒動は、これで終わりじゃなかったのよ。

2

「う〜コレじゃない……………えー、コレでもないの？ あうう……………いったい、どういうパスワードなのよお……………」

放課後の空き教室にわたしはいた。

授業が終われば滅多に人がこないこの場所は、勉強するときや、ひとりになりたいときに来る。いってみれば、わたしの隠れ家的なところだった。

わたしは一番前の席に座り、一心不乱にスマホを弄っている。

もちろん、幼馴染みの男子から、朝に取り上げたものよ。

スカートの中身を撮影した画像が入っているあのスマホ。

肌身離さず持ち歩きながら、ゆっくりできる放課後まで待って、画像もふしだらなアプ

りも削除するつもりでいたわ。

いざ、放課後になって、この教室へ来て、ボタンを長押しし、電源をオンにしたとき、わたしは絶句した。

なぜって、パスワード入力画面が現れたからよ。

アイツのスマホは、電源をオンにする度に、パスワードを入れなければならない設定に
してあったというわけ。

わたしの今の気分は、スマホを盗んで悪用しようという罰当たり者のそれ。

悪いのは、スカートの中身を撮影したアイツなのに、こんな気持ちにさせられるだなん
て！

わたしは悔しくて、半ベそをかきながら、パスワードを入力した。

ううん。入力しまくったの。

あいつの誕生日。自宅の電話番号。暗号の要領で名前を数字にしたり。

けれど、ぜんぜんダメ。

そもそも、こういうものは英数字の組み合わせと相場が決まってる。

しかも、コレの場合、最大で八文字入力できるみたい。

でも、それより短くてもいいケースはあるでしょ？

アルファベットと数字を組み合わせ、八桁以内のパスワードを見つけ出す。

考えただけで、卒倒しそうよ。

泣き叫んでも、どうにもならない。

わたしは唇を噛みながら、一生懸命、頭を働かせる。

アイツの過去や考え方を振り返りつつ、パスワードを推測して、打ち続けた。

そんなとき。

「よお、ミコト。探したぜ。苦労してるな」

わたしの秘密基地にズカズカ入ってきたのは、誰だろう、アイツだった。

悩みの種のスマホの持ち主であり、わたしにとっては学園屈指の問題児でもある、幼馴染み。

わたしより二ヶ月年下で、〇五歳の男子校生。

彼は朝みたいにだらしなく胸元を開け、自慢の胸板を見せてくる。

「あ、あんた！」

アイツは側まで来ると、やけに馴れ馴れしく話しかけてきた。

「パスワード、解けないだろ」

「そのいやらしいニヤけ顔……こうなるのを見越して、電源をオフにしたのね？」

「いくら学園トップレベルの成績でも、パスワードを推理するなんて無理だって」
「探し当てて見せるわよっ」
「無理無理。他のヤツならともかく、ミコトには絶対にわからないのだし」
「なんですって？」
「現に、当ててないじゃんか。しかも、泣きべそかく位、困ってる」
「ぐぬぬ……」
「教えてやってもいいぜ？」
「……え」
「パスワードを教えてもいいと、言ってるんだよ」
わたしは目をぱちくりさせた。
どういう風の吹き回しよ。
「ま、まあ、いいわ。どうせ、すぐに看破できたけれど、どうしても教えたいというのであれば、教わってあげる」
「意地っ張りだなあ、お前。でもいいぜ、教えてやるよ。ただし、条件がある」
そういうことか。
交換条件の提示とは、ありそうなことね。
本当なら、応じないところだけれど、今はコトがコト。
『今日の』スカートの中身の写真は、一刻も早く処分したいもの。
アレだけは、他人の目に触れるのを阻止しないとイケない。
でないとわたしは……。
「……まあ、いいわ。言ってみなさいよ。課題を代わりにやって欲しいの？ それとも、服装検査で手加減して欲しいとか？」
「……お前ってほんと堅物だよなあ」
なぜか彼は溜息を吐く。
頭の上に疑問符を浮かべるわたしに、おもむろに条件を突きつけた。
それは、わたしの予想を遥かに超えていたの。
「服を脱いで、上履きとニーソと下着だけの姿になって、オレに見せてくれよ」
「なんですって！」
わたしは目を剥いてしまったわ。
だって、なんなのその条件……いえ、要求は。
ハレンチ過ぎる！
しかも、際限なく卑劣でオゲレツだわ！

できるわけじゃないじゃない。そう断ろうとしたら、
「言っとくけど、あんまりお前に時間はないぜ？ あの写真、数時間後……夜の八時に学園裏サイトにアップされるよう、設定してたからな」

「なっ！」

「条件を吞まず、自力でパスワードを見つけ出してみせるというなら、そうしてもいい」
わたしは青ざめたり、顔を真っ赤にしたりというのを繰り返した。

どこまで汚い男なのよ、コイツは！

いいなりにするためのハッタリの可能性もあるけれど、もしも本当だったら、わたしの学園生活……いえ、人生は終わりよ。

けれど、コイツに『今日の』下着姿を見せることも論外。

もしも相手が、恋した男性だったなら、話は違うかも知れない。

でもわたしは、目の前のコイツに、恋愛感情なんて一ミリも持ってない。

むしろ、大嫌いと言っていいわ。

ありえないのよ。

条件を吞むだなんて。

かといって、パスワードを探り当てるのは限りなく無理に近いし……。

「心配するなよ。スマホで撮るのはもちろん、誰にも言わない。オレは鬼じゃないんだ。幼馴染みが困るようなことはしないさ」

なに言ってるのよコイツは。

やることなすこと、全部オニじゃないのよ！

でも……。

コイツったら、いつになく真剣な顔してる。

声も、すごく優しい。

うう……信じてても……いいのかな……。

不特定多数に下半身の『今日の』下着姿を見られるよりは、被害をコイツだけにとどめた方が……。

わたしは散々迷ったけど、意志を固めたわ。

「約束は……守ってよね……」

すると、アイツの目が輝いた。

それこそ、星みたいにキラキラしてる。

「当たり前だって、ミコト。んじゃ、早速頼むぜ」

「あうう……」

「ほら、脱いで脱いで。上履きと下着とニーソだけになるんだ」

「お、覚えてるわよ……」

「流石、成績が学園トップレベルの才女。記憶力は抜群だ。そんなヤツの下着姿を拝めるんだからツイてるぜ」

「ぐぬぬぬ……」

わたしは席から立ち上がったわ。

黒板と最前列の間の少し広いところに移動する。

恥ずかしさと悔しさと屈辱感で震える指先で、『風紀命』という風紀委員のシンボル付きの制服を脱ぐ。ブラウスもボタンをひとつずつ外して脱いで、脚を片方ずつ上げてスカートも外した。

脱いだ服は、下着とニーソと上履きのみという、誰にも見せたことのない姿で、ちゃんと畳んで脇の机に置いたの。

っう……コイツの視線……なんて強烈なのよ……。

脱いでる間、瞬きを一回もしなかった。

わたしの誇りでもある『風紀命』の文字付きの制服を、自分の命令で脱衣させているときも、その拍子にオッパイが揺れたり、お尻を突き出す格好になったり、ニーソを半分纏う太ももを上げて強調するポーズをとったりしたときも、ニヤニヤしながら見つめていたわ。

これじゃ、完全に見世物じゃないの。

わたしはなんにも悪くない。

悪いのはコイツなのに。

もう、悔しいったらない！

「おいミコト。棒立ちせずに、ポーズを決めてくれよな。片手は頭の後ろ、もう片方の手は腰に当てて、ちょっと腰をくねらせるんだ」

「くっ……これでいいかしら？」

「そうそう。そんな感じ。いいぜ。思い切りオレを睨み付けてる顔も含めてな」

モデルみたいなポーズを強要するアイツを、思い切り睨んでやったけど、堪えてる様子はない。

逆に喜んでる。

アイツは、わたしを下品に品評し始めたわ。

こう言い始めたのよ。

学園の空き教室で、下着とニーソと上履きという、裸よりも恥ずかしくて屈辱的な姿を強制した幼馴染みの男子は、わたしにこう言ったわ。

「ミコトお前……超エロいな」

「なんでよ！」

「なんでってお前……」

彼は指を折る。

「まずは下着だ」

「っう！」

「それって、マイクロビキニじゃんか」

「そ、それがなによっ」

「パンティーは、サイドが細いハイレグタイプで、しかもクロッチの布地が極端に少ないという。おーおー、盛り上がってるオマンコの花卉がはみ出してるじゃねーか。でも、ヘアは出てない。全部剃ってるんだな。それが逆にエロいぜ」

「あんたがヘンタイだから、そう感じるのよっ」

「そして、ブラ。ホルターネックタイプで、オッパイの先っぽをカバーする布は、ハートマーク。こっちも、乳輪がはみ出しそうなほど小さい」

「これ位、なによッ」

「両方、真っ赤っかのハデハデ。フチに白いラインが入って少し野暮ったいのには、本人の堅物な性格が出ているというか、ガキっぽいというか」

「言いたい放題ねっ」

「けど、カラダはぜんぜんガキっぽくない」

コイツの視線が、いっそう粘ついてきた。

「AV女優顔負けのボンキュボンで、特にオッパイがデカイ。一〇〇センチ、いってるんじゃないかコレ、ん？」

「教える義理はないわッ」

「ちえっ。でも、大きいだけじゃなく、〇六歳の若さを存分に発揮して、思い切り突き出るロケット形であることは間違いない。それに、ケツだ」

彼は下卑た笑みを浮かべながら、わたしの周りをゆっくり回る。

「今朝。ラッキースケベで、スカートの中身を見られたときは、本当に驚いたぜ。お堅い

ミコトが、Tバックを穿いてるんだもんな」

「ッ！」

「しかも、激似合い。細い紐に締め付けられて、十代というよりも、熟女と言いたくなるほどムチムチと実り過ぎた尻タブがはみ出してる様子は、本当に絶景だった。年増じゃ真似できない、十代の瑞々しさをたっぷり孕んで張り詰めてるから、迫力満点だ」

「こいつう」

これなのだ。

わたしが絶対に知られたくなかった秘密。

『今日の』下着姿の正体。

それは、風紀委員どころか、ただの女子学生としても相応しくない、いやらしいハイレグTバックを、穿いていたこと。

下着にかんする校則はないから、校則違反ではないわ。

けれど、学生らしからぬ物を着用していることには変わらない。

こんなことが知れたら、わたしの沽券に関わるでしょ？

だったら穿かなければいいと思うでしょうけど……やめられないのよ。

ちょっとした、冗談混じりの好奇心から通信販売でこーいう、いやらしい下着のセットを買って身につけ、姿見をみた瞬間、異様な興奮を覚えてしまった。

カラダが熱くなって……。

胸の奥に、なにかドス黒いものが渦巻いて……。

奇妙な陶酔に包まれて……。

試したら捨てるつもりだったのだけれど、できなかった。

それから、試験や委員の仕事かんけいとかで、イヤなことがあったり、ストレスが溜まったりしたときに、こういうのが一セットずつ、増えていって……。

初めは、自室でするファッションショーのときだけ着ていたのに、刺激を求める風に、ときどき学園に着けてくるようにもなって……。

真面目に生きてきた反動なのかも知れない。

考えてみれば、人並みのおしゃれも興味なかったわたし。

カラダが大人になり始め、精神も変化する中、キレイでいたいという女性らしい心理が、少し歪んで発現しているのだと思う。

このことは、親兄弟にも言ってない。

誰にも打ち明けたことはなかった。

なのに、よりによって、だらしなくて大嫌いなコイツに知られてしまうだなんて。



「女子校生のニーソのムチムチ太もも最高！ どこの肌も白くてキレイだしな」

「ジロジロ見すぎっ！」

「派手な下着に派手キレイなカラダ。これをエロいと呼ばずにいられるか。こんなカラダ、この学園に他にないぞ」

「褒めてくれてるようだけど、ちっとも嬉しくない。女性を外見で判断するなんて、下劣だわ。弱みを握って女子を支配するあんたは既にサイテーの卑怯者だけどね！」

わたしは歯ぎしりする。

ここは、利用者がほとんどない空き教室とはいえ、学園内。

そこで、女子にこんな格好をさせるだなんて。

よりによって、風紀を守るこのわたしによ？

「ほんと、お堅い女だなお前は」

わたしの背後にしゃがみ込み、お尻を見上げて鑑賞していた彼は、やにわに立ち上がる。

もう飽きたのかと思ったら、とんでもない。

なんとアイツは、抱きついてきたの！

「あ、あんたっ！」

「へへ、あったけー、やわらけー。現役女子校生の半裸の抱き心地は、やっぱりいいぜ」

わたしよりも頭二つ分は大きい大柄な身体は、逞しかった。

胸元を開いて見せつけてる胸板だけじゃない。

全身が筋肉質で、盛り上がっていて。

これって、細マッチョと呼ぶのだったかしら。

抱きすくめられてるだけで、このオスには力では敵わないと痛感させる位に、見事な体付きだった。

そういえばコイツ、確かモテるからって、学園に入ってからジム通いを始めたっけ。

いい加減な性格だけど、マメに続けてるって、聞いていたわ。

帰宅部だけど、運動部に勧誘される位、運動能力は高いそうなの。

わたしには理解できないけれど、コイツを好きっていう女子は、何人か知ってる。

何人もの女子と付き合ってるという、聞き捨てならない噂もあるし。

実際、今朝一緒に登校していた女子との間には、そんな雰囲気があった。

夢を叶えてモテモテ学園生活を送って、このカラダで楽しんでるのかしらね。

同じように抱きすくめられて、オスとしての逞しさを感じさせられた女子が、他に何人いるのかしら。

「見るだけだって、言ったでしょ、離してよ、もう！」

コイツに参ってる女子がいるとしても、わたしは別。
こんなヤツと、懇ろになるつもりは毛頭ない。
小さい頃は仲よくしていたけれど、年を取るにつれてだらしくなってくのに我慢できず、付き合いをやめた位なもの。
わたしは口で言うだけでなく、手足を動かしてもがいた。
でも、ダメだったわ。
ビクともしない。
わたしは完全に、力尽くで、この男子の腕の中に囚われてしまっている。
「見せろ、とは言ったが、見るだけなんて言った覚えはないぜ？」
「屁理屈だわ、このっ、このっ」
「へへ、こんなときにも威勢のいいヤツだ。でも、ちょっと大人しくなってもらおう」
「きゃあっ！」
思わず、大声を上げてしまった。
といっても、コイツは別に、暴力らしい暴力を振るわなかった。
わたしを抱きしめたまま、器用に肘から先を動かしたの。
指先を伸ばして、ブラのハート形の布地を軽く押し上げてる乳首を摘まんで、力を入れただけ。
でも、それだけでわたしは脱力してしまったのよ。
信じられなかった。
電気が走ったみたいな衝撃に襲われたけど、心地いい脱力感が乳首からオッパイ、オッパイから全身に広がって、糸の切れた操り人形みたいになっちゃったなんて。
クタッとなったわたしは、彼の硬い胸板に背中を預けてしまう。
「こんなに反応がいいだなんて、予想外だ……」
彼は感心したような、驚いたような声音で呟き、両手を伸ばす。
わたしを上腕でピッチリ挟んで、もし暴れても身動きが取れないようにしながら、手慣れた仕草でオッパイに触り始めた。
触るというよりも、まさぐるといった方がいいかも。
ロケット形を変えない強さ、あるいは弱さで、ゴツゴツした男子の手のひらが、露出している女子の柔肌を這い回る。
「やたらデカイことといい……ミコトお前……彼氏いるだろ」
「はあ……なによ、藪から棒に……んっ」
「だって、揉ませまくってるとしか思えない、実りぶりじゃねーか。そう考えれば、派手

な下着を着けてるのに頷ける。彼氏の趣味だ」

「不純異性交遊なんて、するはずないでしょ。あんたがそうだからって、わたしも一緒にしないでよ、汚らわしい……あふっ」

「むう……その顔……隠してるって表情じゃないな。マジでフリーなのかよ。すると、こーいう下着姿を男に見せるのも初めてなのか？」

「当たり前よっ……うん……」

「そうか。けど、それはそれでいいな。お前のそういう初めてを、このオレが奪ったわけだ。へへ、燃えるぜ」

「バカっ……あ……そ、そこは……」

コイツは喋りながら手を動かしていたわ。

ずっと、すごく丹念だった。

制服を着崩し、自慢の胸元を見せつけたがったり、無骨な体付きだったりするのに、ちつとも乱暴じゃない。

ひたすら優しく、撫で回しているの。

はああ……。

まるで、お姫様になって、大事にマッサージされてる気分。

でも、これはそんなんじゃない。

だって、わたしのオッパイ……カラダは、疼き混じりの熱を帯びてきたから。

わたしに恋人はいない。

これは、嘘じゃない。

でも、似たような存在が……実はあるの。

それは、俗に言うオトナの玩具。

興味を持ったきっかけは、このサイテーの幼馴染みだった。

コイツが、あろうことか、学園にエッチな漫画本を持ち込んだのよ。

持ち物検査で見つけて没収したわたしは、ひとりのとき、何の気なしにそれを見た。

後から考えれば、それが、アダルトランジェリーに興味を持ったきっかけでもあったのね。

逞しい男性にエッチに責められて、気持ちよさそうによがる女の子の様子に釘付けになって……。

学園生同士がエッチするお話や、わたしのような真面目な風紀委員が、チャラチャラした男子と交わるお話に、特に引きつけられて……。

約束通り、放課後に本を返した後、気付いたらわたしは、同じ本をネットで注文しちゃ

ってたの。年齢指定商品だから、年齢を偽って。

でも、それがすごく刺激的だった。

見るだけじゃなく、作品の真似をして玩具を使ったプレイをしたくもなったわ。

そうして今では、バイブと電気マッサージ器を持ってる。

いつも、学園の風紀を守るために頑張ったり……学園の勉強や運動を頑張ったりしてるんだから……下着のこともだけど、他の誰かに迷惑をかけてるわけじゃないんだから、これ位は許されるはずよ。

そんなわたしだから、性の悦びは知っているの。

だから、彼に愛撫されて、カラダが嬉しがっていると自覚できてる。

「感じてるだろ、ミコト」

「だ、誰がっ……んっ……卑怯者に触られて感じるわけないわ……んふ……」

「強情なやつだなー。これだけでケツを振り出す女子もいるのにさ」

「一緒にしないで」

「けど、やっぱり敏感だな、お前のオッパイ」

「っ……」

「少し撫で回しただけで、かなり反応してる」

「ふん……」

「体温が上がって、熱くなって、細かい汗をかいてさ。大きい上に敏感だなんて、エロいオッパイだぜ。ますます可愛がりたくなる」

彼の愛撫が変わった。

開いた十指を浅めに食い込ませて、手首のスナップを効かせたの。

そうして、オッパイのお肉をユルユルと揺すぶる。

「うっ……これって……」

電気マッサージ器……電マをオッパイに当てたときみたいな振動快感に襲われたわ。

けれど、それとはかなり違う。

バスケットボールだって掴めそうな位に大きな手に、オッパイがほとんど包まれて、隅々までシェイクされていると、電マを当てるときよりも濃密な性感が湧いてくるの。

オッパイ全体によ？

「わたしのオッパイ……揺すぶられてるっ」

声は、まともに震えていたわ。

勝手に歯の根が浮いてしまうの。

オッパイに行き渡る性感が、エッチな汗をどンドン滲ませる。

乳肌の表面は、すぐに、シャワーを浴びたみたいにツヤツヤ。
おまけに、汗の酸っぱい匂いと、ほんのり甘い体臭が混ざって、立ち上りだしてる。
彼の鼻がヒクついたわ。「エロい匂いが強くなってきたぞ」なんて言いながら、さらに
激しくオッパイを揺すぶる。

わたしの双乳は、電マになったみたいに、コイツの手の中でブルブル震えてる。
あうう……背中が気持ちよくゾクゾクしてきたじゃないの。

まさか、気付いてないわよね。

オッパイの横側に、青筋まで浮いちゃって。

わたしのオッパイ、気持ちいいよおって、叫んじゃってる。

でもわたしのオッパイは、多分、女子校生の範疇を超えてるの。

なにせ、オトナの玩具で、夜な夜なストレス解消オナニーをしてきたのだから。

コイツとか、風紀を乱す学生に手間をかけさせられてるせいでね。

お陰で、かなり食欲になっちゃって。

ああ……やっぱり……先っぽまで、熱くなってきた。

卑怯な男子になんか見せちゃイケナイのに、乳首が勃起し始めてる。

ハートの布地の中央から、新芽のように伸びて、びくびく震えてるわ。

「お、乳首が勃ってきたぞ。やっぱり感じてるんじゃないか」

最悪。

めざとく見つけた彼は、早速、指先を伸ばしたの。

邪魔なハート形の布地を、両方同時にずらす。

バランスが崩れ、素材が収縮して、布地は一気に、オッパイの上乳の曲面に沿って駆け
上がった。

後に残ったのは、勃起しかけてるわたしの乳首と乳輪よ。

「うへえ！ 先っぽもエロいなあ。ツルツルでモチモチしていて、触り心地抜群のパイ肌
もよかったが、乳首と乳輪も、〇六歳らしい色つやのピンク色じゃねーか。あーたまんね
え。手触りはどうかなア。さっきは、布越しだったけど、ナマのお味はっ、と」

喜びで震える指先で、おもむろに摘まむ。

わたしは何故か動けなかった。

頭では、コイツなんかに触らせるものですか！ と考えるのだけれど、カラダが動かない
の。

オッパイをさすられたり、揺すぶられたりして気持ちよくされたせいで、力が抜けてしま
ったからなの？

考えてもよくわからない。

性感でぼーっとしてきたせいなのかしら。

「うおっ！ ナマで触るとまた格別だぜ。お菓子のグミみて一な触り心地で、プニプニしてら。気持ちいいぜ。ほれほれ、こういうのはどうだ？」

彼は指ですり潰したり、伸ばしたりしてくる。

くう……こいつってば、やっぱり上手い。

だって、ぜんぜん痛くないのだから。

すり潰すといっても、痛くなるギリギリのところまで押しつぶすのをやめて、擦ってくるのよ。

伸ばすにしたって同じだった。痛いのか気持ちいいのかわけがわからなくなるラインから、逸脱しないの。

「はあっ……はあっ……ああ……だ、ダメ……」

しかもコイツったら、また、オッパイを揺すってきたじゃないの。

乳首だけでなく、オッパイ全体まで刺激されて、わたしの息は急速に上がっていった。

「オッパイを揺すって、ああ、違う……これって、揺するというよりもこねくり回してるのだわ……ンン……そうやって、乳首までいやらしく刺激してくるう」

愛撫がどんどん激しくなる。

まるで、わたしが絶頂しそうになっているのを見透かしてるようだわ。

男もそうらしいけど、お粗末な快感で絶頂したら、欲求不満になってしまう。

そうならないよう、親切にも、最高に気持ちよく果てさせようとしてくれてるみたい。

コイツって、エッチの時は女性思いなのかも。

そう思ったら、カラダが軽くなった。

好意めいたものが芽生えた気がする。

卑怯者への嫌悪感が、ちょっとなくなったのが、ハッキリ分かるもの。

「ミコト、好きなときにイッてくれよ。最後まで気持ちよくしてやるからな」

あうう……こんなときに、優しく語りかけるなんて反則だよ。

風紀委員のわたしが学園内で絶頂……イッちゃうなんて、許されることじゃない。

でも、そんな淫らな欲望を認めてくれるようなことを言われたら、タガが外れちゃうわ。

「はああ……い、イッちゃう……オッパイでイッちゃう……！」

まるで夢みたい。

現実感が薄れていく。

でも、快樂だけは鮮明で。

膨らませている風船みたいに大きくなっていくばかり。

こんな感覚はじめて。

アダルトランジェリーで学園の授業を受けたときや、電マでオナニーしたときも、気持ちよかったけれど、こんなに深い悦びは、味わったことがないわ。

男子……いえ、男性の腕の中でオッパイを可愛がってもらうのが、こんなにいいものだったなんてね……。

男性全員が、同じコトをできるわけじゃないでしょうけど。

コイツが女子の……女の扱いに慣れてるお陰のはずだわ。

そんなことを白濁する頭で考えてるうちに、わたしはオーガズムに至った。

「はあ、はあ、ンン……んあああああ～～～～！」

ふわあ、なんて声。

教室中に響くこんな大声を、わたしが出せるなんて知らなかった。

しかも、幸せそうな甘い声じゃない。

こんな声音、器具でオナニーしたときに、出たことはないわ。

きっと、顔も変になってる。

引き締めた心を表して、いつもキリッとしてる眉も目も、ハの字に下がってるに決まってるわ。

体育の後よりも真っ赤になって汗をかき、常識を言ったり、不心得者を注意したりする口からは、破廉恥な絶頂の言葉だけでなく、淫靡な熱い呼気も出しているのよ。

誰よりも強くコイツを注意してるわたしの口がよ？

そんな表情も全部見られてるの。

コイツだけに。

こんな恥って……こんな敗北って、他にある？

「はあああ、オッパイ、イクっ……イクうっ……！」

分かっているけど、気持ちいいのは止まらない。

知ってる？

男は射精してお終いだけど、女の絶頂は長く続くの。

絶頂時の興奮が持続して、カラダはより敏感になり、食欲にもなる。

オトナの玩具で経験を積んで、開発してきたわたしの場合は、かなり度を超してるはず。

だから、彼が約束通り、しつこくオッパイを根元からこねくり回したり、乳首をすり潰して引っ張ったりしている間、何回もイッてしまった。

ん～……三回までは覚えてるけれど……その先の記憶は曖昧だわ。

イキまくる間、全身から力が完全に抜けて、わたしは彼の胸元にもたれていたわ。
彼はそんなわたしを抱きしめ、支えながら、延々と愛撫してくれた。
「へへへ。ナイスバディなだけじゃなく、敏感でイキやすいなんて、ほんとにエロい女だな、ミコトは。お前こそ、風紀を乱す元凶……校則違反の塊じゃねーか」
「なにバカなこと言ってるのよ……………あっ……………んん……………またオッパイ、イクっ」
冷静でないわたしには、侮辱でしかない彼の言葉も、愛撫と同じだった。
聞かされると背筋がゾクゾクする。
オッパイを責められる快感も手伝って、また簡単に果ててしまうの。
わたしはそうして、長々とオーガズムの悦びに浸っていた。
その先に、とんでもない出来事が待ち受けてるとも知らずに……。

体験版はここまでです。
続きは製品版でお楽しみください。
製品版の分量は体験版の倍程度です。
ご鑑賞ありがとうございました。

奥付

●制作● (2019年9月現在)

作・絵 木森山水道 (別名義 きもりや) (サークル 夜山の休憩所)

ブログ <http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/>

<http://b.dlsite.net/RG11385/> (夜山の休憩所の Blog)

ツイッター <https://twitter.com/kimoriya2> (きもりや @kimoriya2)

ノクターンノベルズ <https://xmypage.syosetu.com/x5925s/> (きもりや)

ピクシブ <https://www.pixiv.net/member.php?id=4149128> (きもりや)

ニジエ <http://nijie.info/members.php?id=987459> (きもりや)

●CM● 小生の商業作品にはこんなものがございます。

「地球警備隊ツイン・スター 不可逆のTS孕ませ陵辱」

挿絵 きばすけ 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン107号「性転換孕ませ特集号」(KTC社刊)

「絶対無敗騎士キリィ・タイム」

挿絵 トモセシュンサク 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン100号「二次元エンド特集号」(KTC社刊)

*100号記念号にして、内容も付録も大充実の永久保存版です!

「健昂優良ビビッド・ガール 淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン」

挿絵 sue 先生 メディア 電子書籍専売品 (KTC社刊)

「学園天使ツイン・セーフティ ～ヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦～」

挿絵 洗面きぬ子 先生 メディア 電子書籍専売品 (KTC社刊)

以上はほんの一例です。通販サイト様、電子書籍ショップ様にて、

「木森山水道」(きもりやますいどう) で是非ご検索ください。



わたしってば、スポーツが好きすぎて
変身ヒロインになっちゃった!

えっ、この星からスポーツがなくなる?
防ぐには、こんなエロ競技で
勝たなくちゃいけないってウソでしょ!?

あちゃー……エロ競技で組んだ、
転校生でイケメンでゴリマッチョで
アレがもの凄いクラスメイトに、
ちょっとメロメロになっちゃったら、
幼馴染みのアイツってば、
超イライラしてるわ!

いったいどうなっちゃうのよ!?

けんこうゆうりょう (↓挿絵: sue先生 小説: 本森山水道)

そんな、「健昂優良ビビッド・ガール
淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン」
は、電子書籍販売店さまで好評発売中♥

あなたもわたしとのシコシコ運動で、
キモチイイ汗かこ♥

カチツ♥

ビビッドガール

検索



ククク……
青空の学園のグラウンドで、
あの「健昂優良ビビッド・ガール」に
こんなになっちゃうく
奉仕してもらえると

体育会系の正義の変身ヒロインは
悪との戦いやスポーツだけでなく、
パイズリとチンポ舐めも、なかなか上手い
ずっとして欲しいくらいに最高の気分だ

「健昂優良ビビッド・ガール
淫らな体育祭で寝取られる淫絨ヒロイン」
電子書籍販売店さまで好評発売中!

ビビッドガール 検索 カチッ♥

うう……こんなに舐めたり吸ったりして、
ローションを塗りたくったオッパイで、
一生懸命ヌルヌル扱いたりもしてるのに、
ぜんぜん倒れてくれないだなんて……
このオチンチン凄すぎるう……

ああ……ドキドキする……
アソコが熱く疼いて堪らない……
○×も見るけれど……
こうなったら……もう……

ギンツ!

ギンツ!

れろ

ぺろっ

じゅすすっ

ずりゆりゆ

すじゅ

いゅるっ

ピンツ!

ピンツ!

没エロ競技 【棒倒し】

男子の硬くそそり立つ「棒」を、
女子がカラダを使って倒し、
(射精させ)その数を競う。

体育祭実行委員が配る
ローションなどのアイテム使用可。

ごころとくにかんしゃ！

まだまだ好評発売中っ♡

キルタイムデジタルブレイク

by「学園天使ツイン・セーフティ
～ヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦～」

小説 木森山水道

挿絵 洗面きめ子 先生

出版社 KTC社

(二次元ドリームノベルズ)

(電子書籍専売レーベル)

*コメント、RT、いいねなど、
どうもありがとうございます！

画 木森山水道



色々なお店で販売中です！

夜のお供に是非どうぞ♡

学園天使ツイン・セーフティ

by「学園天使ツイン・セーフティ
～ヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦～」

小説 木森山水道

挿絵 洗面きめ子 先生

出版社 KTC社

(二次元ドリームノベルズ) (電子書籍専売レーベル)

*コメント、RT、いいねなどに感謝！

既にの方もこれからの方も、

ご購入ほんとうにありがとうございます！

画 木森山水道

